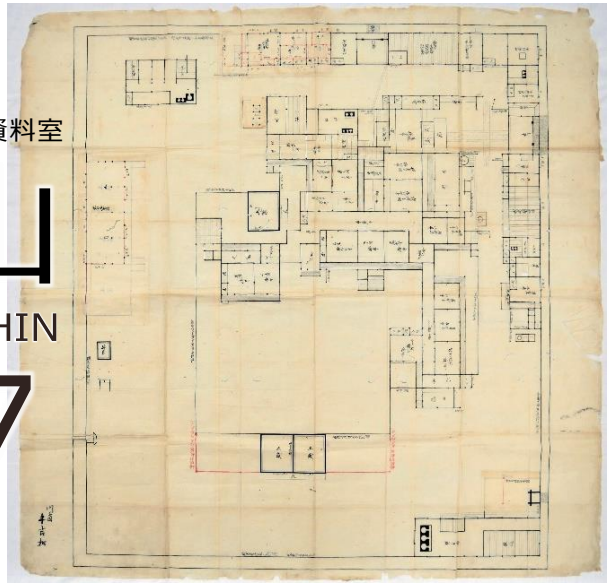
横須賀市立中央図書館郷土資料室

緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信 7



浦賀奉行所絵図
（弘化２年・1845 年頃、永島義信家文書）

発行日
令和３年（2021 年）５月 15 日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所　神奈川県横須賀市上町 1-61
電話　046-822-2077

本誌は印刷発行していません。次の図書館あるいは市史編さん事業のホームページからダウンロードしてください。
https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html

⟨⟨ 資料紹介 ⟩⟩

５・１５事件被告人の手紙

郷土資料室　谷合伸介

昭和７年（1932）５月 15 日、海軍士官・陸軍士官候補生・民間人等が、首相官邸・政友会本部・警視庁・内大臣邸・日本銀行等を襲撃し、首相官邸にいた犬養毅首相らを射殺した。いわゆる 5・15 事件である。この事件は、殺害や破壊により帝都を混乱に陥れ、軍部に戒厳令を施行させ、既成の支配層から軍部中心の内閣を樹立し国家改造につなげることを企図したものだった。

昭和５年（1930）頃から始まった昭和恐慌は、庶民の生活を苦しめた。また、同年に海軍軍令部の承認を得ることなく調印したロンドン海軍軍縮条約に対しても、政府に対する不満が噴出した。この事件の背景には、そうした当時の既成支配層に対する人々の鬱積した不満があったと考えられている[1]。

この 5・15 事件の中心となったのは、海軍青年将校で、一連のクーデター計画の立案は、古賀清志（海軍中尉）や三上卓（海軍中尉）らが主導した。また、この事件の最も象徴的な出来事であった犬養首相殺害の実行犯は、三上卓・山岸宏（海軍中尉）・黒岩勇（海軍予備少尉）・村山格之（海軍少尉）らの一団であった。三上らは首相官邸に押し入り、抵抗した警備の田中五郎巡査を射殺、さらに奥へと進み、食堂で犬養首相を発見した。犬養首相は、「話せばわかる」と繰り返し、三上を客間に誘導した。後から来た黒岩や三上らが立ち囲む中、犬養首相は座って煙草を出そうとし、また三上らにもすすめようとした。その際、山岸の「問答無用、撃て」との声が響き、黒岩が銃弾を犬養首相の頭部に発射、ほぼ同時に三上も銃弾を発射し同様に命中した。撃たれた犬養首相は、しばらくは息があったというが、その後息を引き取った[2]。

一連の襲撃が終わると、海軍士官や陸軍士官候補生らは、東京憲兵隊に自首し、民間人として参加した者らは、その後検挙された。警察に逮捕されると刑事事件として裁かれることになるため、軍に所属する者らはこれを避け、陸海軍の軍法会議で裁きを受ける道を選択し憲兵隊に自首したといわれている[3]。

こうして軍関係者の裁判は、軍法会議法廷で行われることとなった。海軍側の公判は、昭和８年（1933）７月 24 日横須賀鎮守府軍法会議法廷で、陸軍側の公判は、同年７月 25 日東京青山の第１師団軍法会議法廷で実施された。

海軍側の被告らは、大津の横須賀海軍刑務所に収監され、4 畳半程の部屋に畳 2 枚が敷かれた独房に入れられた。それでも、彼らは、ちり紙に綴ったメモでやり取りするなどして、獄中内で連絡を取り合い、公判に備えたという[4]。

７月 24 日の公判開始の日、横須賀には報道関係者が殺到し、新聞の号外が出されるほど、この裁判は世論の注目を集めた。僅か 30 枚の傍聴券を得ようと午前０時頃から三笠記念館前には人が集まり始めた。また、被告らが、横須賀海軍刑務所を出て軍法会議法廷がある横須賀鎮守府に護送される沿

道には、炎天下の中、その車を一目見ようとおびただしい群衆が集まった。このため、沿道の警備として 100 名の警官、枢要通路には衛兵や憲兵が警戒を行うほどの物々しさであった[5]。こうして、世間の目は、横須賀の軍法会議法廷に注がれることとなったのである。

〈海軍軍法会議で起訴された 10 名〉

罪名	被告人	年齢	求刑	判決
反乱罪	古賀清志	26	死刑	禁固 15 年
	中村義雄	26	無期禁固	禁固 10 年
	三上卓	28	死刑	禁固 15 年
	黒岩勇	27	死刑	禁固 13 年
	山岸宏	26	無期禁固	禁固 10 年
	村山格之	26	無期禁固	禁固 10 年
反乱予備罪	伊東亀城	26	禁固 6 年	禁固 2 年（執行猶予 5 年）
	大庭春雄	25	禁固 6 年	禁固 2 年（執行猶予 5 年）
	林正義	28	禁固 6 年	禁固 2 年（執行猶予 5 年）
	塚野道雄	35	禁固 3 年	禁固 1 年（執行猶予 2 年）

海軍側で起訴された被告は 10 名で、その内訳は反乱罪が 6 名、反乱予備罪が 4 名だった。公判が始まると、被告らはロンドン海軍軍縮条約に調印した政府への非難、統帥権干犯に対する弾劾を主張し、やむを得ない行動だったと正当化した。被告らの声に同情した世論の熱狂は次第に激しさを増し、やがて彼らを英雄化するようになっていく。9 月 11 日、反乱罪で起訴された 3 名の被告に死刑が求刑されると全国各地から 70 万を超える助命嘆願の署名が集まり、減刑を求める声が沸騰した[6]。

こうした経過を辿っていく中で、被告らは順に法廷に立つこととなるが、大庭春雄（海軍少尉）もその一人だった。大庭は、8 月 17 日に陳述を行ったが、横須賀市立中央図書館には、公判中に彼が書き記した手紙が残されている。

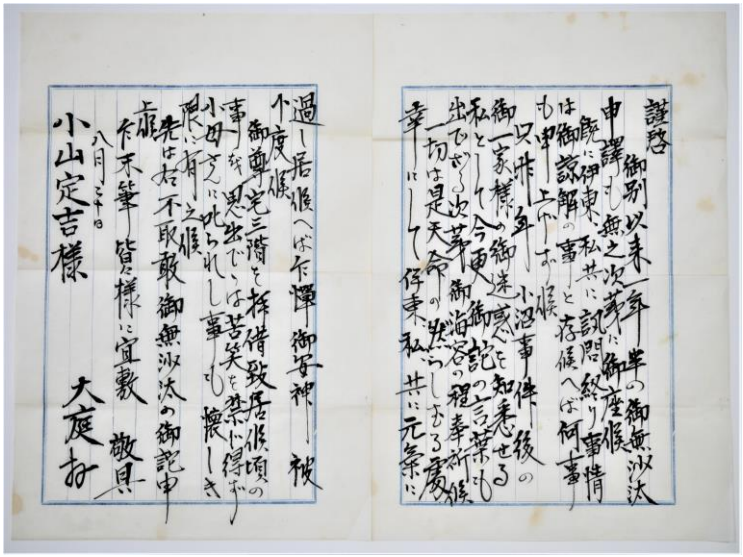
大庭春雄の父は、陸軍大将を務めた大庭二郎、兄は陸軍大佐を務めた大庭小二郎であり、彼は軍人の家庭に生まれた。そのため、父の任地の関係から、小学校を 4 度転校することとなったが、その間に不親切な教師に出会い、教育に対する不満から為政者を非難する気持ちになっていたと自ら語っている[7]。

大庭は、事件当日の襲撃現場には加わらなかったが、武器の運搬に深く関与していた人物だった。犬養首相襲撃に関与した村山格之は、上海出征中だった昭和 7 年 4 月 16 日、上海に碇泊中の軍艦出雲において、海軍大尉田崎元武からブローニング拳銃 1 挺と弾丸 50 発を入手した。上海と佐世保間を往復していた駆逐艦楡（にれ）の乗組員だった大庭がこれらを佐世保に持ち帰り、同月 21 日、古賀清志に渡した。また、同じく上海出征中だった三上卓は、手榴弾 20 個を入手し、これを村山に渡した。村山は、先ほどと同様に駆逐艦楡の乗組員であった大庭にこれを渡し、大庭は佐世保まで運搬した。大庭は、佐世保海兵団に勤務していた林正義（海軍中尉）にこれを渡し、林は同団に勤務していた塚野道雄（海軍大尉）宅に運搬する。同所で黒岩勇・大庭・林・塚野の 4 名が塚野の手提げ鞄に手榴弾を詰め、その後、黒岩が先に林から受け取っていた 1 個と合わせ計 21 個の手榴弾を東京に輸送し、友人宅でこれを隠匿した[8]。

このように、大庭は上海、佐世保間の通信艇の乗組員であったことから、武器の運搬に深く関与していた。大庭は、いずれも村山から武器を受けとっているが、2 人は兵学校の同期であり、そのつながりもあったのであろう。大庭をはじめとした反乱予備罪で起訴された 4 人は、実際の襲撃の現場には参加していない。古賀らが立案した計画は、この 4 人が除外されたなかで決定されている。当時、この 4 人のうちの 1 人であった伊東亀城（海軍少尉）が上海出征時に負傷し入院中であったため、準備不十分を理由に古賀らに計画の延期を訴えたが、聞き入れられず、当日の襲撃に加わらなかったのである。

大庭が軍法会議で陳述した 3 日後の 8 月 20 日、彼は収容されていた海軍刑務所から手紙を書いた。横須賀の小川町に住む小山定吉に宛てたその手紙には、横須賀が 5・15 事件とその前後の関連事件の 1 つの舞台として、どのような関わりにあったのかを窺わせる内容が記されている。

〈大庭春雄の手紙〉



（「小山家文書」横須賀市立中央図書館所蔵）

〈釈文〉

謹啓
御別以来一年半の御無沙汰
申訳も無之次第に御座候
既に伊東、私共に訊問終り事情
は御諒解の事と存候へば何事
も申上げず候
只昨年小沼事件後の
御一家様のご迷惑を知悉せる
私として今更御詫の言葉も
出でざる次第御海容の程奉祈候
一切は是天命の然らしむる処
幸にして伊東、私、共に元気に
過し居候へば乍憚御安神被
下度候
御尊宅三階を拝借致居候頃の
事を思出でゝは苦笑を禁じ得ず
小母さんに叱られし事も懐かしき
限に有之候
先は右不取敢御無沙汰の御詫申
上候
乍末筆皆様に宜敷　敬具
八月二十日　大庭拝
小山定吉様

手紙は封書で、封筒の裏には「浦賀町大津官有地一」の住所が書かれ、差出人として「大庭春雄」の名が記載されている。消印は、昭和 8 年 8 月 21 日であり、文中に「訊問終り」という言葉が出てくることからも、公判中に海軍刑務所から差し出された手紙であることが確認できる。

受取人である小山定吉は、楠ケ浦の米酒商で、明治 29 年（1896）から同 39 年（1906）まで横須賀町会議員、明治 40 年(1907)から大正 14 年(1925)までは横須賀市会議員、さらに大正 13 年（1924）から昭和 3 年（1928）まで神奈川県会議員を務めた人物であった。「御別以来一年半の御無沙汰」とあるように、大庭は、昭和 7 年 2 月頃まで小川町にあった小山家の 3 階を間借りして暮らしていた。また、そこには伊東（亀城）もおり、小母さんに叱られたことなどを懐かしんでいる。実際、大庭の任地は、佐世保以前は横須賀であったから[9]、その頃のこととみられる。先述のとおり、大庭は村山と兵学校の同期だったが、伊東もまた同期であった[10]。2 人は、兵学校のみならず、横須賀での下宿先も一緒で、常に同じ釜の飯を食べた関係だったことがわかる。大庭にとって、横須賀の小山家での生活はよき思い出となっていた。

この手紙で注目すべきは、「只昨年小沼事件後の御一家様のご迷惑を知悉せる」という一文である。大庭は、「小沼事件」によって小山家に迷惑をかけたことを大変気にしていた様子が読み取れるが、この「小沼事件」とは何か。それは、昭和 7 年 2 月 9 日、前大蔵大臣井上準之助が射殺された事件（血盟団事件）のこととみられ、その実行犯こそ小沼正（おぬましょう）という人物であった。小沼は、日蓮宗の僧侶で国家主義者であった井上日召（いのうえにっしょう）の影響を受けていた。井上日召の「1 人 1 殺」の考えのもと、その意を受けた小沼は井上準之助の射殺を実行した。事件の 1 か月前の 1 月 9 日、井上日召を始めとする民間人メンバーと海軍関係者らは協議の場をもち、そこで 2 月 11 日に政財界の者を暗殺することを決定する。しかし、1 月 28 日、上海事変が勃発し、海軍側のメンバーに戦線への出征が命じられたため、当初の計画を変更せざるを得なくなった。1 月 31 日、緊急会議を招集し、まず民間のメンバーが「1 人 1 殺」を決行し、その後上海に出征した海軍側のメンバーが帰り次第、第 2 陣として決起するという流れとなった[11]。大庭は、この 1 月 9 日・31 日の謀議に両日とも海軍側のメンバーとして参加していた。実は、小沼は、この 1 か月前の 12 月から井上日召の紹介により同じ横須賀の竹見家で暮らしていた[12]。竹見家での生活は約 2 か月程度であったが、小沼は以前からの知り合いで親しかった伊東が下宿する小山家に度々遊びに来ていた。1 月になると、横須賀に転任となった大庭が小山家に下宿するようになった。大庭は 2 月には小山家から転居しているため、実質 1 か月程の短期間の居住であったが、大庭と小沼も以前からの知己であったことから、下宿先の小山家は皆が集まる場となっていた。

小沼は、「非常に小山のお内儀さんが非常に私を可愛がって呉れたのです、或る時、伊東さんや、小沼さん、大庭なら幾ら文句を言ってもいゝ」[13]という話を語るなど、伊東や大庭が不在の時でも小山家に自由に出入りできる関係であったことを回顧している。そうしたなかで、先述の上海事変が勃発し、当初の計画が変更となった。1 月 31 日、大庭は東京での緊急の謀議に参加し、小山家に帰宅すると、夜 11 時頃、帰りを待っていた小沼と会った。そこで、2 月 11 日の計画が無くなったこと、明日あたりに井上日召から上京せよとの命令が小沼に下ることが伝えられたのである。実際、翌日の 2 月 1 日、東京から小沼のもとにその電報が届き、その後、小沼は横須賀から上京し、2 月 9 日、井上準之助の殺害に至るのである。彼らは、一連の計画に関する話を他の者がいる前では決して話さなかったため、小山家の人たちは、こうした話が家の中で行われていたことは知る由もなかった。しかし、結果的には小山家が、大庭から小沼に計画変更に関する内容を伝える謀議の場となってしまったのである。

以上の経緯から、先の「只昨年小沼事件後の御一家様のご迷惑を知悉せる」とは、世話になった小山家が小沼らの関係先として疑いの目が向けられたことに対してのものと推察され、「私として今更御詫の言葉も出でざる次第」には、巻き込んでしまった小山家への大庭の心苦しさが表れたものと捉えられるのである。なお、小沼は、その後、裁判で無期懲役に処された。

さて、5・15 事件に関する横須賀鎮守府軍法会議での判決は、昭和 8 年 11 月 9 日に言い渡された。求刑とは大きく異なり、大幅に減刑される結果となった。死刑を求刑された 3 人は禁固 15 年または 13 年の判決、反乱予備罪で起訴された大庭や伊東は求刑の禁固 6 年から禁固 2 年の判決となり、執行猶予もついた。一方、事件に関与した民間人に対する判決は、東京地裁大法廷で下されたが、ほぼ求刑通りの判決で、海軍側の被告らとは比べられない程、重いものとなった。

11 月 13 日、執行猶予の判決が出た大庭ら 4 人は釈放された。判決後、大庭と伊東は共に海軍を免官となった。その後、大庭は満州で、伊東は上海で仕事をする一方、2 人はともに小山家を訪問していたことが、釈放後 1 年半程経った昭和 10 年 4 月の伊東から小山定吉に宛てた手紙からわかる（「小山家文書」）。その後も、この 2 人と小山家との交流は続いていたのである。

「小山家文書」において、大庭と伊東の手紙は、5・15 事件を伝える新聞記事（『東京日日新聞』昭和 8 年 7 月 24 日号外、同年 7 月 26 日夕刊）の切り抜きと一緒に保管されていた。2 人に部屋を貸していた小山定吉は、一連の事件の影響で「迷惑」を受けつつも、かつて自宅に下宿していた彼らの裁判の行方を大変気にかけていたことが窺える。

本稿では、5・15 事件の被告人の手紙から、一連の事件に関わった人物と横須賀の人たちとの交流の一端を紹介した。これらの資料は、昭和初期の日本を揺るがしたテロ事件と横須賀とをつなぐ貴重な郷土資料といえよう。

（註）

1. 小山俊樹『五・一五事件』（中公新書、2020 年）
2. 『五・一五事件－陸海軍公判記録－』（九州日報社版、1933 年）
3. 田中宏巳『横須賀鎮守府』（有隣新書、2017 年）
4. 林正義『5・15 事件（一海軍士官の青春）』（新人物往来社、1974 年）
5. 『東京朝日新聞』『東京日日新聞付録神奈川東日』（1933 年 7 月 25 日）
6. 註 1、註 3
7. 註 4
8. 註 2、『東京日日新聞』号外（1933 年 7 月 24 日）
9. 註 4
10. 『日本海軍士官総覧（復刻版）』（柏書房、2003 年）
11. 『血盟団事件公判速記録　上巻』（血盟団事件公判速記録刊行会、1967 年）
12. 竹見家は醤油屋を営んでいたが、小沼はその近辺の横須賀の印象を「空気が綺麗だし暖かい」、「保健上此処は非常に良い」と語っている。
13. 『血盟団事件公判速記録　下巻』（血盟団事件公判速記録刊行会、1968 年）

（参考文献）

・『東京日日新聞付録神奈川東日』（1933 年 9 月 12 日、11 月 10 日、同 11 日）
・『血盟団事件　上申書、獄中手記』（血盟団事件公判速記録刊行会、1971 年）
・『新横須賀市史　軍事編』（横須賀市、2012 年）

郷土資料室事業概要（令和２年度）

1　レファレンス・サービス件数

○ 問い合わせ件数　85 件
○ 資料利用・掲載許可件数　66 件
○ 資料（写真・絵葉書等）貸出・閲覧件数　10 件
○ 資料複製（デジタル化）件数　33 件

2　関連団体の研修会等参加実績

○ 2 月 25 日、横須賀市立中央図書館レファレンス研修　神奈川県立図書館・日比野悠志「レファレンス入門・インターネット検索入門」〔谷合・藤川・宮城〕
○ 3 月 11 日、横須賀市自然・人文博物館職員研修　和洋女子大学准教授・加藤紫識「民俗資料を中心とした人文系資料の保存と活用のあり方」〔谷合・藤川・宮城〕
○ 3 月 23 日、横須賀市自然・人文博物館職員研修　国文学研究資料館准教授・西村慎太郎「歴史資料の保存と活用―自治体と地域の博物館―」〔佐藤・谷合〕

※ 令和 2 年度は、新型コロナウィルス COVID-19 の蔓延に伴い、本市が加盟する神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会関連の総会・講演会・研修会を始めとして、予定していた研修会等が中止になり、本市職員を対象とした上記 3 回の参加にとどまった。

3　依頼業務等

○ 10 月 30 日、横須賀市市民大学講座「徹底検証！横須賀の日本遺産」第 1 回講師〔佐藤〕

4　所蔵資料等の公開・活用事業

○ 郷土資料室所蔵資料ミニ展示『戦後の横須賀』展＋図書企画展示『戦争とは、平和とは…』展（中央図書館 1 階ロビー、7 月 23 日～8 月 30 日）

『戦後の横須賀』展の様子

○ 郷土資料室所蔵資料ミニ展示『新発見の浦賀奉行所絵図』展、永島義信氏所蔵の奉行所平面図 2 点（浦賀コミュニティセンター分館、10 月 24 日～11 月 30 日）

○ 郷土資料室所蔵資料ミニ展示『野村吉三郎』展＋図書企画展示『野村吉三郎関連図書』展（中央図書館 1 階ロビー、12 月 5 日～27 日）

○ 郷土資料室所蔵資料ミニ展示　2 月 15 日市制記念日特集『横須賀市役所庁舎の変遷』展（中央図書館 1 階ロビー、2 月 9 日～24 日）

『新発見の浦賀奉行所絵図』展の様子

『野村吉三郎』展の様子

『横須賀市役所庁舎の変遷』展の展示パネル

○ 図書館のホームページ「デジタルアーカイブ」での資料公開
A) 明治末から昭和初期の絵葉書の公開（124 点、12 月 4 日）
B) 『緒明山通信』及び『市史資料室通信』のバックナンバー全ての公開（12 月 8 日）
C) 陸軍重砲兵連隊関連写真の公開（16 点、2 月 2 日）

5　寄贈資料　（寄贈者、敬称略）

(1) 高田早苗書「自敬立身」(附：前島密自筆趣意書)、写真、校印等　93 点　市立大楠小学校
(2) 大村肇氏旧蔵写真（デジタルデータ）　890 点　北海道・Harry Shibata
(3) 野村吉三郎書「思無邪」　1 点　東京都・伊藤修一、仲澤仁子
(4)「横須賀市教育会幼稚園紀念写真帖」等　4 点　市内・石渡哲男
(5) 戦前期の映画館・商店等のチラシ（デジタルデータ）4 点　市内・梶谷叡正
(6) 第三号艦建造記録ほか横須賀海軍工廠関連資料 11 件　市内・関口丈信
(7) ガントリークレーン、スチームハンマー、泊船庵関連写真・資料等　14 件　市内・関口丈信
(8) 伝三浦道寸古筆切等　6 点（デジタルデータ）　鎌倉市・個人匿名

1963.8.31 Kanaya River（大村肇氏旧蔵写真）

昭和 18 年　野村吉三郎書「思無邪」

1974.8.7 解体工事中のガントリークレーン

6　図書寄贈者・団体等一覧　（五十音順、敬称略）

秋田県公文書館　厚木市文化財保護課
安祥文化のさと地域運営共同体
市川市市史編さん事業担当
市立市川歴史博物館　大牟田市市史編さん室
神奈川大学日本常民文化研究所
鎌倉市中央図書館近代史資料担当
川越市立博物館　清瀬市市史編さん室
呉市海事歴史科学館
神戸市文書館新修神戸市史編集室
佐倉市市史編さん担当　寒川文書館
諏訪市教育委員会　世田谷区立郷土資料館
世田谷区史編さん担当　茅ヶ崎市市史編さん担当
豊田市市史編さん室　仲澤仁子
長野市公文書館　葉山町郷土史研究会
常陸大宮市教育委員会　姫路市市史編集室
福岡市博物館市史編さん室
藤沢市文書館　府中市市史編さん担当
町田市立自由民権資料館
大和市市史・文化財係　湯河原町町史編さん係
横浜開港資料館　横浜市史資料室

6　刊行物

緒明山通信　第 4 号　令和 2 年 7 月 1 日
緒明山通信　第 5 号　令和 2 年 11 月 22 日
緒明山通信　第 6 号　令和 2 年 12 月 5 日（令和 3 年 1 月 13 日改訂）

7　事務執行体制の変更

	令和 2 年度	令和 3 年度
教育長	新倉　聡	新倉　聡
教育総務部長	佐々木暢行	佐々木暢行
中央図書館長	山口正樹	山口正樹
図書サービス係長（郷土資料室）	深水賢一	深水賢一
主任	谷合伸介	谷合伸介
再任用職員	佐藤明生	佐藤明生
会計年度任用職員	宮城　睦	宮城　睦
会計年度任用職員	藤川杏奈	藤川杏奈
会計年度任用職員	藤田美由紀	
会計年度任用職員	山口涼子	

あとがき

緒明山通信第 7 号をお届けします。今号では、5・15 事件に関わる資料の紹介と昨年度の事業概要を報告しました。

なお、本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただく方式により無償で頒布しています。

図書館 HP「デジタルアーカイブ」のご案内

横須賀市立図書館ホームページでは、「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。戦前の絵葉書や写真等の郷土資料のほか、『緒明山通信』（旧『横須賀市市史資料室通信』）のバックナンバーもご覧いただけますので、こちらの URL か QR コードからアクセスしてください。

https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/